

境界で声を聴く

— 罪を繰り返す障害者の“よりそい型支援”をもとにして —

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
前阪 千賀子

刑務所から地域社会へ橋渡しする支援を通じて、私が見て聞いた刑務所出所者の生活世界の物語は、捜査、裁判、受刑と分断的にしか関われない司法機関では彼らが決して語らなかった声で、前科ある凶悪な人と色眼鏡で見て排除されがちな地域社会では、彼らが語ることができなかった声で満ちていた。本研究では、罪を繰り返す障害者一人の人生の物語に則して、「社会復帰」や「更生」などお決まりのフレームでは収まりきらないリアルな世界を社会に伝えることを最大の目的とした。

研究対象者について、支援を通じて見聞きしたことを記憶に留め、記録したものを時系列にまとめながら生活世界全体を2部構成で描き出した。1部には、私が研究対象者と出会うまでのライフストーリーについて、研究対象者との対話から引き出された物語をそのまま描き出した。2部では、研究対象者が出所した後に私も支援者として関与しながら観察した、研究対象者と私の協働の物語を描いた。

「過去の物語」と「協働の物語」から明らかになったことは、出所後に直面する壁や地域社会の落とし穴について、漂流しながらも良き人生に停泊して、地域社会に留まっている研究対象者や危うき前提で漂流に寄り添う支援者の現状について、また刑務所から地域社会への、司法から福祉への、また過去から未来への境界で、さらには犯罪と非犯罪の境界で出会う、支援者が担う役割についてである。